ついたら御覧ください。

人文学部

吉丸雄哉准教授)

いいと思っています。今後も、展示に気が 年に、四回ほどのペースで展示ができれば 展示で本の紹介をすることになります

特

集

## 



究に三重大学の貴重書を利用できるこ

とになります。それまでは、このような

目録が完成しましたら、全学で教育・研 への登録完了は早くて来年度でしょう 割進んだ段階で、目録の完成やOPAC

なると思います。和本はカード採りが九 年度のうちに館内での一般利用が可能に スへ登録を申請しているので、早ければ今 済ませて、電子化し、全国漢籍データベー 録を作られていました。再度、チェックを 授の井上進先生が三重大学在籍中に目 うはもともと現名古屋大学文学部教



属図書館は漢籍約300点と和本約 館蔵貴重書の整理事業の成果です。附

000点を所蔵しています。 漢籍のほ

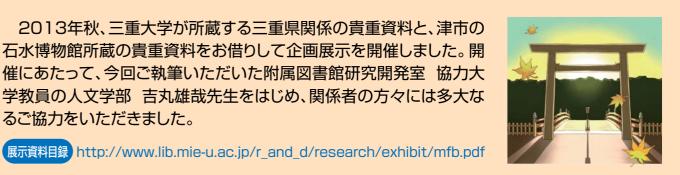


るご協力をいただきました。

http://www.lib.mie-u.ac.jp/r and d/research/exhibit/mfb.pdf

2013年秋、三重大学が所蔵する三重県関係の貴重資料と、津市の 石水博物館所蔵の貴重資料をお借りして企画展示を開催しました。開

学教員の人文学部 吉丸雄哉先生をはじめ、関係者の方々には多大な



の遷宮と参詣」「津の偉人」の三部にわ けました。やはり昨年が遷宮年であるこ さらに「三重の風土と文学」「伊勢神宮

重では伊賀出身の松尾芭蕉や松阪の本

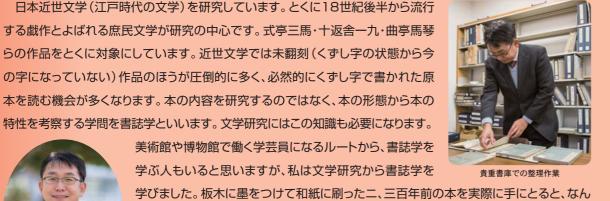
齋藤拙堂の三人をとりあげました。三 への信仰がうかがえます。 からは、今も昔も変わらないお伊勢さん 和神異記』や参宮のガイドブックである け多くて、平成のおかげ参りなどと言わ す。昨年は伊勢神宮への参詣者がとりわ 『伊勢参宮按内記』『伊勢神宮細見大全』 れているそうです。おかげ参りの記録『明 とは意識しました。『伊勢参宮名所図会』 ました。『遷宮物語』は遷宮の記録で 『神都名勝誌』では遷宮の場面を展示 「津の偉人」では谷川士清、津坂東陽

間ですが、もともと展示用につくられた って新たにできたスペースです。素敵な空 玄関ロビーは、附属図書館の改修によ

ますと、私の架蔵本です。 本ですかと時折聞かれました。実を言い ル展示としました。個人蔵本はどなたの の本はたいへん貴重なので、11月13日から 大学附属図書館の本です。石水博物館 の2点を除いた残りの18点はすべて三重 全部で23点の作品を展示しました。石 文学」は、10月29日(火)から11月26日(火) 19日までの展示とし、残りの期間はパネ 水博物館からお借りした3点と個人蔵 まで、附属図書館玄関ホールで行われ 「三重の風土と文学」が全体テーマで、

のか、本の順番と順路はどのように設置 どの作品にどの展示ケースが向いている どの位置に展示ケースを置けばいいのか でもなく、展示の素人であったため、展示 私自身は学芸員の資格を持っているわけ ているので、何の問題もなかったのですが 世の人間の責務だと思っています。 作業で頭を悩ませました。玄関ロビーの 展示の解題を書くのは何度も経験し

展示をあたりまえに行うのが存外難し 展でも感じたことですが、あたりまえの ました。20 ちからアドバイスをもらえたので助かり 員の資格の取得を目指している学生た 学芸員の龍泉寺由佳さんや本学で学芸 位置においたらいいのか、などで試行錯誤 すればいいのか、照度や湿度はどのよう しながら展示しました。石水博物館の に管理すればいいのか、キャプションはどの 13年4月の「藩校の漢籍」



利ですが、その分セキュリティの心配もあ

ます。石水博物館の本がたいへん貴重

くても、閲覧できるので一般来場者に便

なので、私はまさかのことを心配してい

ましたが、杞憂でよかったです。

展示は三年前から行っている附属図書

があります。いちいち入館許可をとらな 印刷物を展示するには照度が高い場所 場所ではないので、位置によっては繊細な

人文学部 吉丸雄哉准教授

美術館や博物館で働く学芸員になるルートから、書誌学を 学ぶ人もいると思いますが、私は文学研究から書誌学を

音丸先生から皆さんへ

学びました。板木に墨をつけて和紙に刷った二、三百年前の本を実際に手にとると、なん ともいえない感動があります。これらの古い本は貴重な文化財ですが、市井にまだまだ をつけて大事に保管してください。どうしても管理できない場合は、図書館や博物館な どに寄贈なさるといいと思います。







居宣長はよく知られていますが、津だけ このような偉人たちの業績の顕彰は後 優れていたことも尊敬している理由です 思っていました。三人とも教育者として を見ても、文学史上に重要な文事をな した人たちがいることを伝えたいと常々

13年秋季展示「三重の風土と